

# 生存科学研究ニュース

Vol. 33, No.1

2018.4 発行

発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1

tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp http://seizon.umin.jp

## ネット技術の進化に思う

東海大学医学部基盤診療学系医療倫理学教授

竹下 啓 (理事)

大学を卒業して 25 周年ということで、母校から卒業式に招待されました。残念ながら仕事があつて出席することはできませんでしたが、週末に行われた卒業後 25 周年記念の同窓会には参加することができました。久しぶりに再会した同級生たちの顔を見て、四半世紀の時の流れを実感いたしました。

25 年前と現在とで、同級生の容貌以外に何が大きく変わったでしょうか。

医学の分野では、iPS 細胞に代表される再生医学の興隆は、25 年前の私には想像もできませんでした。また、主に形態学的に分類されていた悪性腫瘍や神経変性疾患が遺伝子変異に基づいて再分類されるようになり、さらにそれが治療にも繋がるようになってきたことには感慨深いものがあります。

インターネットに代表される情報通信技術の進展の大きさは驚異的だと思います。私が大学生の頃は、今でいうオタク的にコンピュータを愛好している友人が音響カプラーを用いたパソコン通信をしていました。当時、文献検索といえば、月に 1 回更新される MEDLINE の CD (何年分かがタワー状に装填されていた) を使って図書館で行うものでしたが、その後 PaperChase という業者を通じてネット上で有料(10 ドル/月程度)で検索できることを覚え、1997 年には PubMed で無料で検索できるようになった時には狂喜しました。

たしか 64kbps の ISDN が高速インターネットと言われていた時代で、PHS を使ったモバイル通信は無給の医局員には高嶺の花でした。電話回線を用いて接続するため、先輩医師を呼び出すのに自宅に架電してもネットに接続していると延々と話中で連絡がつかないこともありました。今ではスマートフォンを用いたテザリングや街中の WiFi を通じてどこでも簡単にネットに接続できます。通信速度は Gbps (ギガですからキロの 10<sup>6</sup> 倍の速さ) の時代になって、映画をネットのストリーミングでストレスなく見られる

ようになりましたが、これも画像 1 枚表示するのに数分かかることもあつた昔を思うと、まさに未来を生きているという気がいたします。

海外の学会誌は、以前ははるばる航空便で分厚い冊子体が送られてきたものですが、最近ほとんどネットでダウンロードして読むものになっているのも改めて考えると隔世の感がいたします。PubMed で検索してそこから雑誌のホームページのリンク先に飛んで PDF ファイルをダウンロードするのは今では日常的なことになっています。

情報を得るだけでなく、発信するのも簡単になりました。以前はホームページを開設することは、いわば特殊技能という印象でしたが、今ではホームページを作らないでも Facebook や Twitter といった SNS を用いて誰でも簡単に世界中にそれもリアルタイムで情報を発信できます。

誰かが動画を見るとそれに応じて広告収入を得られるような仕組みもあり、たとえば YouTube で動画を配信して収入を得る YouTuber になることに憧れる小学生が多いそうです。ある小学校が 4 年生男子に将来の夢を尋ねた調査で、第 1 位がサッカー選手、第 2 位が医師、第 3 位が YouTuber だったというのが話題になりました(毎日新聞 2018.3.22)。ちなみに第 4 位は公務員だったそうです。

*New England Journal of Medicine* など主要な医学雑誌や学会では、ホームページだけでなく、Facebook や Twitter でも日々情報発信ができるようになっています。最新論文の紹介だけでなく、クイズ形式の臨床問題などもあり、コメント欄はさまざまな国の医師たちで賑わっています。

私は、昨 2017 年春から津谷喜一郎先生と共に生存科学研究所の広報を担当させていただいています。今のところ生存研はホームページと紙媒体の機関誌での情報発信が主体になっていますが、SNS を活用することも検討に値すると考えています。生存研には、貴重な歴史的資料が残っています。これを必要な手続きを経て、movie や pdf をネットで配信することを計画しています。もしかしたら生存研が YouTube で資金を稼ぐ日が来るかもしれませんよ。

## 2018年度事業計画によせて

理事長 青木 清

2018年度の生存科学研究所の事業計画を生存科学研究ニュースに報告できましたことを慶びとします。

当財団は創立者の故武見太郎先生の理念である「生存の理法」を探究すべく生存科学研究所として設立されました。



ここでいう「生存科学」とは広く全世界における環境的・経済的・社会的なエコロジー（生態）とのかかわりの研究を、社会の存在と存続に必要な諸条件に関する考察と討議を行いながら実践していくことを目的としています。このことは即ち人間の生存をいかに守るか、そして人間の未来への架け橋となるためには何をしたらよいかを常に考察し実践することです。

2018年度採用された各研究課題と各事業は上記の主旨と目的に適ったもので、これらが目的達成のために成就することを願っています。

また、終りになりますが、当研究所が将来さらに発展するためにこれら研究事業に多くの若手研究者に参加してもらいたいと願っています。皆様のご支援とご協力をお願いする次第です。

## 2018年度 事業計画

2018年度事業計画が決まりました。その概要をお知らせいたします。

### I. 事業方針

当研究所は、人類の生存の形態ならびに機能に関する総合的、実践的研究による健やかな生存科学への寄与を目的として、縦割りの学問ではなく、哲学、倫理学、法学、社会学、経済学、生命科学、医学・医療学の諸科学の視点にも合わせた、健康科学の立場から総合的な、生存モデルの確立を図っている。また、人類の健康な生存秩序の確保に寄与すべく、生存科学に関する研究および普及啓発のための事業を行っている。

2018年度も、助成規模を維持し、当研究所は研究支援、自主研究事業、助成事業を中心として、研究活動を推進する。

### II. 事業内容

上記、事業方針に則り、2018年度についても自主研究事業、助成研究事業、シンポジウムの開催、学術誌「生存科学」およびニュースの発行などの事業内容で

実施する。

なお、世界の経済状況の大きな変動による、金融資産の運用状況が極めて厳しい環境下、常務理事会において効率的な研究所運営を検討するとともに、内部費用の節減に取り組む。

### 1. 自主研究事業

- 1) 当研究所の会員に、生命科学、臨床医学、社会医学、保健科学など人類の健康の維持と増進および疾病の治療と予防に関する研究。また、環境・生態、経済、文化など生存科学に関する研究を支援する。
- 2) 調査研究を対象に募集し、継続事業（研究）に6件（3年目5件、2年目1件）、新規事業（研究）に7件の申請があった。自主研究事業は、概ね3年以内と規定しており、2018年度自主研究事業に9件（継続6件、新規3件）を採択。

#### ・継続研究（3年目）

- i) 対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造
- ii) 少子高齢化時代の都市型災害対策；Health・Coexistence・Well-beingを意識した社会基盤システムの検討
- iii) 老人観の転換による持続可能社会の展望
- iv) 健康の社会的要因としてのソーシャル・キャピタル研究会
- v) ライフイノベーションの展開に伴う倫理的・法的・社会的検討

#### ・継続研究（2年目）

- vi) 生存科学とエンパワメント実践に関する研究

#### ・新規研究

- i) 生存の理法の新たな展開に関する研究
- ii) 環境予防医学包括制御研究会
- iii) 森・その地域社会、生活文化、精神世界における役割の再生的研究

### 2. 研究助成（公募）

- 1) 我が国の大学またはそれに相当する研究機関等において、生命科学、倫理学、経済学、社会学、医学、保健科学など人類の健康の維持と増進および疾病の治療と予防に関する研究テーマを主導的に実施している個人またはグループに助成する。研究助成事業の募集は、学術誌、ホームページで公募、申請者は、当研究所の会員・非会員を問わないが、研究助成採択者には、当研究所の活動を発展させるために会員になることを促している。

- 2) 助成事業の内容は、助成研究について、ホームページ等を活用し公募を行った。

#### 助成研究

- i) 認知症医療・介護における心理社会学的研究

2018 年度も社会が直面している高齢化問題を探究するため「認知症医療・介護における心理社会的研究」の課題について公募を実施し、7 件中 5 件を採択。

#### ii) 被災地支援に関わる防災学的研究

平成 23 (2011) 年の発災後 8 年目を迎えた東日本大震災被災地の復興支援の取組みを継続し募集、1 件の申請、1 件を採択。

東日本大震災被災地の復興支援の取組みについては、発災以来 5 年間継続して東北被災地における津波減災を目的とした「生存科学の森」づくりの研究を行っている、一般社団法人森の防潮堤協会に復興支援の取組として助成を行っている。

### 3. 機関紙等発行事業

#### 1) 学術誌「生存科学」の発行

学術雑誌は研究成果公表の場のひとつである。当研究所は、日本学術会議協力学術研究団体として指定されており、学術研究の向上を図るためにも学術誌「生存科学」の発行を充実させる。また、当研究所の事業、研究活動の成果をより効果的に周知する機関誌とする。

当研究所で実施している、研究活動助成事業で採択された事業については、研究計画申請時に研究成果の発表方法を記載させるとともに、研究報告を、学術誌「生存科学」に投稿するよう規定している。

#### 2) 生存科学叢書の刊行

当研究所発行の学術誌「生存科学」にこれまで掲載、投稿された発表論考を「生存科学叢書」として、株式会社日本評論社から刊行する。

長年の懸案であった生存科学叢書の発刊について、目途が立ち以下 5 件の生存科学叢書を刊行する予定である。

石井 威望 著「21 世紀の伊能忠敬(仮)」

イヴ・ジネスト、本田 美和子 編、「ユマニチュードを語る(仮)」

宮脇 昭、日置 道隆 編、「新しい防潮堤—被災地再生の処方」

堀内 勉、小泉 英明 編、「資本主義、その本質と近未来像」

松下 正明、斎藤 正彦 編、「認知症医療・介護の最前線(仮)」

#### 3) 電子書籍出版助成

生存の質を決定する健康価値創造資源 - その俯瞰包括的な構造化講演会 - の内容を記録して、SNS 上で健康価値創造ホームページを創設して、eBook として発表する。

### 4. シンポジウム・セミナー事業

1) 「生存科学」について問題提起し、それぞれの立場から「生存科学」について論じる場として、毎年 1 回開催している。

2018 年度については、これからのシンポジウムの有り方を考え、生存科学シンポジウム開催に向け準備を行う。開催に向けては、刊行物、Web を活用し広報活動の充実を図り、参加者の確保にも努める。

2) 生存科学公開講座、研修会、セミナー等の開催支援助成として、毎年好評の市民公開講座(ユマニチュード)に継続助成、新規に、「事故から緊急対応会議の開催まで」の研修会及びシンポジウムの開催助成を行う。

### 5. その他

#### 1) 広報活動

当研究所の理念、事業ならびに助成活動の成果をより効果的に周知するため、刊行物、Web を利用した広報活動の一層の充実を図る。

生存科学研究ニュース(年 4 回:4 月,7 月,10 月,1 月)の内容充実による広範な生存科学に関する情報提供を行うとともに、タイムリーな話題提供等に努める。

#### 2) 会員制度

現在、当研究所の賛助会員として 150 名程が入会している。その何割かの会員に入会を継続する必要性が低下傾向にある。会員のメリットを分かりやすく告知するなど、会員にとって魅力あるサービスを提供する効果的な対策を検討する。また、若手研究者等の新規入会に向けて検討を行う。

### III. 事業運営

当研究所の組織の形態に基づき、各事業等の進捗状況、運営状況についての動向を常に確認し、相互に連携しつつ、当研究所の理念である「生存科学」を確立していく。さらに自主研究においては年度途中に研究責任者とヒアリングを行い、事業の適切な実施に向け、助言、評価を行う。研究成果については、シンポジウム、市民公開講座、学術誌「生存科学」を通じ、研究成果の公表に努める。

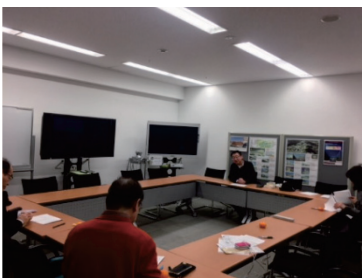
研究者として責任ある研究活動を行うために、研究不正行為防止に関する規程、研究活動に関する基本的な考えを、当研究所として整備し、公正な研究活動を推進する。

生存科学の活動状況および今後の予定についてホームページを充実活用し、より一層の普及活動を行う。

「ライフイノベーションの展開に伴う  
倫理的・法的・社会的検討」研究会  
研究責任者 河原 直人

2017年12月22日(金) 18:30-20:00、九州大学有楽町オフィスにて、2017年度自主研究事業「ライフイノベーションの展開に伴う倫理的・法的・社会的検討」の第1回研究会を開催した。

ライフサイエンスのイノベーションに係る《因果性》に着眼した考察を試みる本研究プロジェクトの2年目にあたり、大林雅之先生(東洋英和女学院大学教授)から、「生命の論理と因果性 - 西田幾多郎の「論理と生命」を手掛かりに -」と題する講演が行われた。



この講演は、西田幾多郎著『論理と生命』(岩波書店)、黒崎宏著『悪の起源 - ライプニッツ哲学へのウィトゲンシュタイン的理解』(春秋社)、池田善昭・福岡伸一著『福岡伸一、西田哲学を読む - 生命をめぐる思索の旅 動的平衡と絶対矛盾的自己同一』(明石書店)などの文献をふまえ、特に「生命の弁証法」と「相互排他的生命現象」、「行為的直観」と「矛盾的自己同一」の概念の捉え方に関して、同先生による詳細な検討と考察が加えられたものであった。

講演終了後の総合討議も充実しており、生命現象を考察するにあたっての哲学的な思考の枠組みをめぐり、仏教の「縁起の思想」、さらには、システム論の考え方も参照した議論が展開された。

本講演において扱われた諸々の概念は、今後のライフイノベーションの哲学的基盤の形成をはかっていくうえで、重要なものとなるだろう。

2018年3月24日には、本年度第2回目の研究会が九州大学病院キャンパスで開催された。前半は、参加者一同で、九州大学医学歴史館を見学し、同館所蔵の種々の歴史的資料を閲覧することができた。この見学では、生命医科学に関する過去・現在・未来の動向をめぐって、お互いの問題意識を深めあう良い機会となった。

上述の歴史館の見学終了後は、九州大学病院において、高木美也子先生(東京通信大学教授)によるゲノム編集に関する講演が行われた。ここでは、食における遺伝子組換えとゲノム編集の遺伝子操作に関する違いをふまえたうえで、近年の遺伝子組換え食品に関する消費者意向調査、ゲノム編集研究者達による安全性に対する独自調査の結果概要から、研究者と消費者間のコミュニケーションの重要性が示された。また、今般の遺伝病における

ゲノム編集に関する国際的な動向、生殖細胞系におけるゲノム編集に対するアンケート調査の結果概要、さらには、WADA(世界アンチ・ドーピング機構)が禁止する遺伝子ドーピングの動向なども紹介され、多面的な議論が展開された。

以上、2017年度も多様な内容が取り扱われたが、いずれも《因果性》に係るアプローチが意識されるとともに、今日のライフサイエンスに係る新たな思考の枠組みを構築するための重要な視点を提供するものであった。今後、これらの議論をふまえ、取りまとめをはかっていければと願っている。

九州大学医学歴史館にて



岩沼市千年希望の丘、海に見える植樹祭

2018年4月21日(土)、晴天に恵まれる中「復興支援ありがとうの森2020-宮城県岩沼市千年希望の丘、海に見える植樹祭-」が開催され、当研究所青木理事長が出席しました。

植樹祭主催者である、一般社団法人森の防潮堤協会に復興支援の取組として研究助成を行っております。当日は、約1,800人の参加があり約15,000本の苗木を植え切ったとの報告を受けました。



研究会等日報  
2018年4月-7月

- 4月13日(金) 第1回みらいエンパワメントカフェ
- 5月14日(月) 公益事業採択研究交流会
- 5月17日(木) 環境予防医学包括制御研究会
- 6月7日(木) 第1回理事会
- 6月8日(金) 第2回みらいエンパワメントカフェ
- 6月27日(水) 定時評議員会
- 6月29日(金) 第3回みらいエンパワメントカフェ
- 7月1日(日) 第6回市民公開講座(ユマニチュード)
- 7月13日(金) 第4回みらいエンパワメントカフェ